



コンコラプトル全身骨格（複製）

企画展 平成27年5月16日（土）～7月5日（日）

2 ポーラ美術館コレクション **レオナルド・フジタ展**—パリへの視線

企画展 平成27年7月18日（土）～8月30日（日）

3 **大恐竜展** ～進化と生態のなぞ～

3 シリーズ「学校と博物館をつなぐ」④ **自然観察の視点** ～鳥取市小学校理科教育研究会理科部夏季研修より～

4 [自然] 資料紹介 **微生物がつくった岩石：ストロマトライト**

5 [人文] コラム **江戸時代鳥取の食肉事情**

資料紹介 **青島の縄文土器**

6 [美術] コラム **先進館視察に随行して**

新収蔵品紹介 **黒田稲阜《遊鯉図》**

7 [山陰海岸学習館だより] **太古の動物の足跡化石**

8 **講座・観察会・毎週土曜はアートの日!**

ポーラ美術館コレクション レオナール・フジタ展 —パリへの視線

レオナール・フジタ（藤田嗣治、1886-1968）は、1913年26歳で初めて渡仏した後、独自の「乳白色の地」を活かした絵画で一躍画壇の寵児となり、以来、エコール・ド・パリを代表する画家としてその作品は今なお人々を魅了しています。本展は国内最大級の規模でフジタ作品を収蔵するポーラ美術館のコレクションから、同時代のパリで活動していた画家たちの作品をあわせ、計170点を紹介します。

フジタの生涯において、パリそしてフランスは非常に重要な存在であったと言えます。東京美術学校にて絵画を学んだフジタは、中学生の頃からフランス語を独学するなど早くからパリへの留学を意識していました。父の職場の先輩であった森鷗外に、中学卒業後すぐに渡仏するかどうかの相談をしたところ、「美術学校だけは一通り出てから洋行した方が得策」と諭されたというエピソードも残っています。また、パリに着いてまもなく、知り合いになった画家に連れられピカソのアトリエを訪問する機会に恵まれたフジタは、アンリ・ルソーの作品を初めて見て衝撃を受けます。「絵画というものはかくも自由なものだ、(中略)その日即座に私は自分の絵具箱を地上に叩きつけて、一步から遣り直さねばならぬ」と後年（1929年）出版した随筆集『巴里の横顔』で振り返り、記しています。この決意の後、苦しみながらも独自の表現を目指し、研究と努力を重ねた結果が、かの「すばらしき乳白色」と

高く評価された裸婦のシリーズだったのです。

さて、パリでの成功を収めたフジタは1929年、16年ぶりに日本の地を踏みました。約4ヶ月の滞在ののちパリに戻りましたが、2年後には世界恐慌の影響で不景気になったパリを再び離れ、以後中南米への旅行や、日本での滞在の日々が長く続きました。この間、各地で壁画を含む大画面の群像画や映画、そして第二次大戦中の「戦争画」など、変わらず旺盛な制作活動を行っていましたが、敗戦後の戦争責任の問題を巡る画壇への不信感から、再びフランスへ戻ることを強く願いはじめます。第二次大



アメデオ・モディリアーニ《婦人像(C.D.夫人)》1916年頃 油彩/板 ポーラ美術館蔵

戦後の1950年、ようやく念願のパリへの帰還を果たしたフジタは、1955年にはフランス国籍を取得、それからは日本に帰ることもなく、1968年に歿するまでこの国で生き、制作することを選びました。

本展では、最初の渡仏からまもない1910年代の作品を起点に、晩年にあたる1960年代の作品までを、フジタの「パリへの視線」をめぐって三つの章に分けて展観します。第一章「アヴァンギャルドのパリへーエコール・ド・パリ前夜」では、前述のルソーからの影響を受けたと思われる《パリの要塞》(1917)や《キュビズム風静物》(1914)など数少ないフジタの初期作品によ



レオナール・フジタ《朝の買い物》1962年 油彩/カンヴァス
ポーラ美術館蔵 ©Foundation Foujita/ADAGP,Paris&JASPAR,Tokyo,2015 X0020

り、独自の画風を確立する過程を見ていきます。また、親友アメデオ・モディリアーニ、ジュール・パスキンやキース・ヴァン・ドンゲン、キスリングといった、フジタと交流していた画家たちの作品もあわせて展示し、当時の熱いパリのアートシーンの様子を再現したいと思います。「アトリエにて—不在のパリをめぐって」と題した第二章では、30年代から40年代にかけてパリを離れていたフジタが、その長い不在の時を経て描いた、少女や子ども、動物等を描いた絵画を紹介します。フジタの空想から生まれたそれらの作品群は、可愛らしさよりもむしろ陰を帯び、外界とのつながりを断たれた夢の世界の住人のような印象を与えています。そして最終章「私のパリー「小さな職人たち」」では、「プティ・メティエ」と称される路上での呼び売りや、伝統的な手業による職人など、さまざまな職業に扮した子どもが描かれた一連の作品群を展示します。パリの街とそこに息づく人々の営みを主題にするこの連作は、もともとフジタのアトリエを飾るタイル状の絵としてつくられたもので、そのおかしみのある姿に、人間の営為と創造性に対する尊敬と慈しみの情を感じることができます。

また、戦時下日本のアトリエにたびたび訪れ、フジタの制作風景を撮影していた土門拳の写真作品10点もあわせて紹介します。作品が生みだされる現場、その制作の秘密を知る手がかりとして、楽しんでいただきたいと思います。

(美術振興課 赤井 あずみ)



アンリ・ルソー《シャラントン＝ル＝ボン》1905-1910年頃 油彩/カンヴァス
ポーラ美術館蔵

大恐竜展 ～進化と生態のなぞ～

私たち人間が「恐竜」の存在に気づいてから約150年、恐竜はずっと私たちを魅了し続けています。恐竜は人々の好奇心をかき立て、そして科学の世界へ導いてくれる扉のひとつともいえるでしょう。

恐竜の中でもティラノサウルスは絶大な人気を誇っています。ティラノサウルスの学名は *Tyrannosaurus rex* (ティラノサウルス・レックス) で、暴



ティラノサウルスのインタラクティブ・ロボット

君トカゲの王様という意味です。略してT-REXとも呼ばれます。T-REXの進化と生態については諸説あり、今も研究が続いています。この研究を進める上で重要な標本の一つに



2001年アメリカのモンタナ州でみつけた全身骨格(愛称:ジェーン)があります。ジェーンは全長が約7mとT-REXより小さく、骨

ティラノサウルス類“ジェーン”(複製)

の成長停止線から年齢は11歳くらいと推定されています。また、T-REXの上あごの片側の歯は多くても13本ですが、ジェーンは17本あります。これらのことから、ジェーンにはT-REXの子どもという説と、別の種類「ナノティラヌス」という説があり、研究と議論が続いているのです。

今年の夏、鳥取県立博物館にジェーンがやってきます。中国地方初上陸です。全長12mの大人のT-REXの全身骨格も展示しますので、ジェーンと比べてみてください。その他、卵を抱いていた姿を復元したコンコラプトルの標本(表紙写真)など、100点以上の恐竜標本や復元ロボットを展示し、恐竜の進化と生態にフォーカスします。この夏はぜひ恐竜の世界をお楽しみください。

(学芸課 川上 靖)

シリーズ「学校と博物館をつなぐ」④

自然観察の視点 ～鳥取市小学校教育研究会理科部夏季研修より

春、新年度の小学校各学年の理科はどのように始まるのでしょうか。教科書の扉を開くと、3年生では「しぜんを見つめる」、4年生では「自然とかかわる」など、どの学年でも身近な自然が題材でありながら毎年その内容が深化していくことがわかります。

また、これらを題材にするページには、風景などのマクロ的な写真と、その中から切り出された生物や生物の部分のようなミクロ的な写真が併せて使われている特徴があります。これは、自然観察の視点として「マクロでみる、ミクロでみる」ということが大切であることを示しています。

平成25年度、このような「自然観察の視点」を鳥取市の小学校の理科の先生方45名と実践を試みる機会がありました。鳥取市国府町の旧美敷水源地で「マクロでみる、マクロでみる」「五感を使う」「生物どうしのつながりをみる」などを実践の目標として身近な自然の観察を行いました。終了後のアンケートには、五感を使うと見え方が変わってきた。様々な場所に行くと違いを感じたいと思った。普段何気なく見ている草木もよく見ればいろいろな発見があることがわかった。「なぜ」「どうして」「おもしろい」とワクワクすることが豊かな学びにつながると思った。足を止めてみる大切だと思った、

などの感想がありました。また、「五感を使う」については、39名が実践できたと回答し、自然の観察の手法として、効果的で実践しやすいことがわかりました。

学校の庭や周辺でできる自然の観察の手法は26年度の「教員のための博物館の日」でも紹介しました。春になり、先生方の実践と多くの子どもの笑顔が花開けばと思います。

(学芸課 清末 幸久)



身近なしぜんの観察実践中

微生物がつくった岩石: ストロマトライト

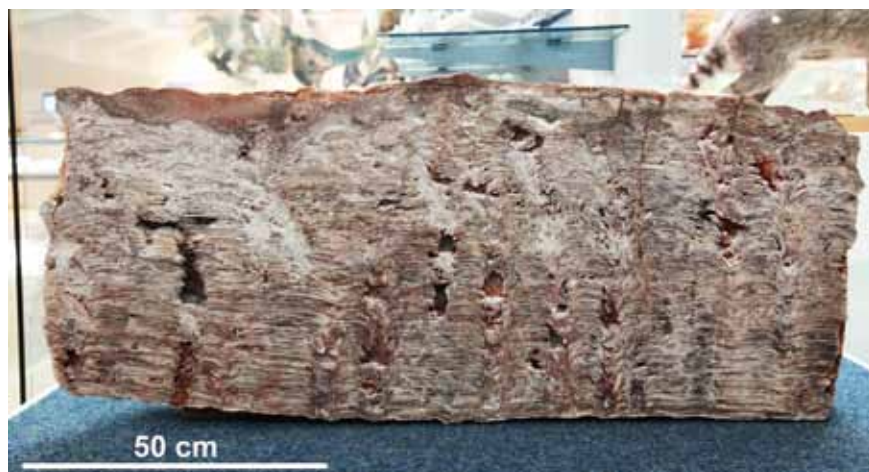
酸素は我々だけでなく多くの生物に欠かせないものです。現在の地球の大気には、酸素が約21%含まれています。しかし、約46億年前に地球ができてから約20億年間は、地球の大気に酸素はほとんどありませんでした。では、酸素はどこからやってきたのでしょうか？ そのヒントが今回紹介する『ストロマトライト』に隠されています。

写真の縞々模様の石は、当館自然展示室に展示している、今から約5.1億年前にできたストロマトライトです。ストロマトライトとは、微生物などが関与することで形成される、縞々の構造をもつ岩石(堆積物)のことをいいます。この縞模様、よくみると逆さまにしたお皿を積み重ねたような形をしていて、これはこの岩石が上へ上へと成長した跡です。顕微鏡で見ると、この一つの縞の中にさらに細かい縞々が見えます。この他にも、カーペットを重ねたようなものや、とんがり帽子を重ねたようなものなど、

様々な形態のものが知られています。形成場所も様々で、海でできるものもあれば、湖や温泉などの淡水環境でできるストロマトライトもあります。

今から約24億年前から約5億年前ごろまでは、地球上のあちこちでストロマトライトが、形成されていました。20世紀の初頭から、太古のストロマトライトについての研究が始まりましたが、それがどのようにしてできるかは大きな謎でした。しかし、1960年代に西オーストラリアで現生のストロマトライトが発見されると研究は急速に進展しました。このストロマトライトをよく調べてみると、ドーム状の岩の表面にはシアノバクテリアという真正細菌の仲間がたくさんみつかり、ストロマトライトの形成に重要な役割を果たしていることが分かりました。また、シアノバクテリアは細菌でありながら光合成を行い、酸素を作り出します。そのため、ストロマトライトの表面からは酸素がでできます。

地球大気の酸素は、約24.5億年前から増加をはじめ、約22.2億年前に急激に増加し、20億年前には酸素濃度が約1%程度になっていたことがわかっています。ちょうどこのころにストロマトライトが多様化することや、シアノバクテリアが存在した証拠が約24億年前の“地層”から見つかることなどから、この酸素の急増にシアノバクテリアの大繁栄が関わっていることが言われています。ただ、実際にはこの時代のストロマトライト自体からはシアノバクテリアの直接的な痕跡はみつかっていないので、ストロマトライトの多様化と酸素の増加を直接つなげる証拠はこれからの研究を待つ必要があります。自然展示室に展示中のストロマトライトをぜひご覧いただき、ぜひ太古の地球に思いをはせていただければと思います。(学芸課 徳田 悠希)



約 5.1 億年前のストロマトライト (産地: オーストラリア) / 自然展示室



お皿を積み重ねたような縞々



一つの縞の中にさらに細かい縞々

江戸時代鳥取の食肉事情

現代の私たちにとって、牛・豚・鶏などの肉はかかせない食料です。ふつう、肉食が一般化するのには明治以降とされ、それ以前、肉食は基本的に忌み嫌われていたと言われます。一方で、庶民たちは猪や鹿など獣肉を食べていたことは広く知られ、明治初年に牛鍋がすんなりと民衆に受け入れられた背景に、こうした獣肉食文化があったといえます。それでは、江戸時代の鳥取の食肉事情はどうだったのでしょうか。

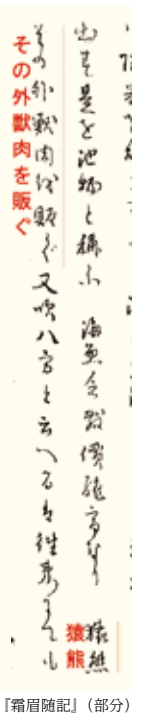
これについて詳しく知ることは困難ですが、断片的にわかる史料があります。鳥取藩の学者である平田眼翁『因伯産物薬効録』はそのひとつです。同書は万延元年(1860)成立の因幡・伯耆の動植物辞典というべき書物で、そのなかに食用される獣

類が記され、鶴・雉・猪・狸・狐・猿が挙がっています。

また、19世紀後半成立の岡島正義『霜眉随記』(当館蔵)という随筆を見ると、鳥取における獣肉販売の一端がわかります。同書の巻四は、因幡地域(現・県東部)の風物詩や産物などを簡単にまとめたものですが、これによると、旧暦12月頃に兎や猪、熊、猿の獣肉が鳥取の市で販売されていると記されています(図参照)。

ここで注目されるのが両書とも猿を食用としていることです。この驚きの事実は、現代からすると「野蛮」とされそうですが、少なくともわずか150年ほど前の先祖たちは獣肉のひとつとして猿を見ていたことを示しています。

明治13年(1880)、牛肉料理店同楽亭が鳥取追廻町(現・鳥取市西町)に開店しました(『鳥取明治大正史』)。メニューは、牛鍋・すき焼き・ステーキといった現代でもおなじみの料理のほか、変わり種として「さし身」がありました。明治となってわずか十数年の間に、鳥取に新たな肉食文化が入って来たのですが、その味はどのようなものだったか、ぜひ再現して食べてみたいものです。(学芸課 大嶋 陽一)



『霜眉随記』(部分)

資料紹介

青島の縄文土器

青島は、鳥取市湖山池の南側に浮かぶ周囲1.8kmほどの小さな島で、鳥取の「ひょうたん島」とも言われています。湖山池の南岸を通ると、岸から200m足らずの近接した場所にぽっかりと「ひょうたん島」が現れます。お花見やピクニックなど遊びに出かけたことのある方も多いのではないのでしょうか。

この青島は1923(大正12)年に山陰地方で縄文土器がはじめて発見された記念すべき場所で、鳥取の歴史を語る上で忘れてはならない遺跡です。縄文時代だけでなく弥生や古墳時代にも人々の活動が続く青島遺跡として古くから知られています。

その後の発掘調査では、現在当館の歴史・民俗展示室で展示している写真の縄文土器が見つかっていません。これは縄文時代後期(約4500年

前)の土器です。外側には、伸びやかな深い線と縄目で「磨消縄文(すりけしじょうもん)」と呼ばれる模様が描かれています。実はこの土器の模様を細かく観察すると、南四国や九州地方の流行を取り入れていて、当時の交流をうかがうことができます。また土器の形は、ソロバン珠のような菱形の形で、同じ時期の土器が緩やかな曲線を描くのに対して、直線で構成された固い印象の形をしています。

縄文土器は、岡本太郎などの現代の芸術家が入り入れるほど、人を魅了する美しさや精巧さがあります。しかし本来は、人々の交流や、実際に使われる用途にも深い関わりがあるはずで、この土器ひとつを見ても、鳥取では見られない他の地域の模様や形を取り入れており、そこには人

と人の繋がりが映し出されています。ひとつのものの中に、機能や交流をうかがえる歴史的な要素と、造形の美しさや精巧さといった美術的な要素をあわせ持つ「縄文土器の世界」を楽しんでいただきたい資料です。

(学芸課 酒井 雅代)



青島の磨消縄文土器

先進館視察に随行して

鳥取県立博物館では、施設の老朽化、収蔵庫の狭小化といった問題を抱える現施設の将来を検討するために、本年度、「鳥取県立博物館現状・課題検討委員会」を設置しました。委員会は林田英樹元文化庁長官を会長に県内外の専門家、利用者代表ら12名によって構成され、昨年夏以降、五回にわたる協議を重ねました。協議ばかりではなく、昨年11月には三班に分かれて国内の先進施設に実際に足を運び、博物館の現状や方向性についての見聞を深めました。ここでは私が随行した関東地区の視察について簡単に報告しておきます。

一泊二日のタイトなスケジュールで、



神奈川県立近代美術館葉山館のトラックヤードで説明をうける委員たち

委員二名、博物館協議会委員二名、そして教育委員会を含む事務局三名の計七名が、神奈川県立近代美術館（鎌倉、葉山）、神奈川県立歴史博物館そして神奈川県立生命の星・地球博物館を巡りました。神奈川県立近代美術館は日本で最初の近代美術館として長い歴史を有し、最初は同じ博物館に同居していた歴史部門と自然部門が独立し、三分野がそれぞれの施設を構えるにいたった神奈川県内の事例は今後の施設整備のうえで一つのモデルを提供しているように思えます。私たちは初日に神奈川県立近代美術館の鎌倉館と葉山館を、課題検討委員会の委員の一人でもある水沢館長自らの案内で見学しました。翌日は最初に横浜市を中心部に位置する神奈川県立歴史博物館を訪れ、竹内副館長以下から説明を受けました。建築自体が重要文化財に指定されたこの博物館には、建築の魅力を展示にも生かすたくさんの工夫がありました。最後に訪問した神奈川県立生命の星・地球博物館は同居していた二つの部門のうち自然系が平成7年に独立したもので

す。施設の巨大さもさることながら、県立施設でありながら、世界的な視野からの展示、収集を行っている点に驚きました。私にとって自然系博物館のバックヤードを見せていただくのは初めての経験で、勝山学芸課長のお話も今後の自然系博物館の在り方を考えるうえで示唆に富んだ内容でした。

三つの館をじっくり視察し、たくさんの方のお話を聞き、多くのことを考えました。博物館や美術館にとってまず必要なのはヴィジョンであること、そして地域との密接な関係の中でヴィジョンを実現していくことの重要性。当たり前なことなのですが、日常業務から離れて先進館の新しい試みに触れた今回の視察は、単に検討作業の一環というよりも、美術館や博物館の仕事の本質について思いを馳せるよい機会となったと思います。委員の皆さんもおそらく同じ思いを抱かれたことでしょう。この貴重な経験を今後の検討に生かしていきたいと考えます。

（副館長 尾崎 信一郎）

新 収 蔵 品 紹 介

黒田稲皐 《遊鯉図》

鯉、鯉、鯉……。大きな鯉、小さな鯉、頭部を隠して胴部のみ見せる鯉など、合計13匹の鯉が一幅の中を泳いでいます。幅50センチ足らずの掛軸のなかに群鯉の姿を見事に捉えた本作。描いたのは、江戸時代後期の鳥取藩士・黒田稲皐（1787～1846）です。

留まることなく常に動いている魚の姿を、自然な動きをもって表現するのは、並大抵のことではありません。いったいどのように表現されているのでしょうか。

中心となる一匹の大きな鯉に注目してみましょう。鯉のからだの丸みを繊細なグラデーションをつけて立体的に表現していることがわかります。さらに、水中で何匹も重なり合う鯉の奥側と手前と

でも丁寧に少しずつトーンを変えて奥行きが表現されています。このように複雑な構成と水中独特の階調変化の表現を、稲皐は自家葉籠中ものとして描いています。さらに、的確で迷いのない筆運びが、鯉に生き生きとした生命力を与えているのです。計算された群鯉の配置のなかに見られる、鯉の動きのある写実的な表現。これが「鯉の稲皐」とも呼ばれる、稲皐の鯉図の醍醐味といえるでしょう。

稲皐の鯉図は、アメリカのボストン美術館に4件（掛幅）、また東京藝術大学に六曲一双の屏風が1件、それぞれ所蔵されています。当館も鳥取県保護文化財に指定されている「群鯉遊泳図屏風」（六曲一双）などを所蔵しています。昨

年収集したこの作品は、稲皐54歳の画業後期にあたる作で、鯉の腹部、背びれ、目玉に金泥を用いて装飾性も加味された、鯉図の完成形ともいえる優品となっています。



黒田稲皐 《遊鯉図》

（美術振興課 山下 真由美）

太古の動物の足跡化石

動物の化石というと、アンモナイトの殻や恐竜の骨格など、体の固い部分そのものが化石となったものを思い浮かべる人が多いと思いますが、海底にくらした動物が掘った巣穴や陸上の動物が残した足跡など、生物が活動して残した痕跡も、生物のおおよその種類や生活の様子を知る上で貴重な化石です。

鳥取県鳥取市から京都府京丹後市にまたがる山陰海岸ジオパークでは、数多くの貴重な化石が見つっています。その中でも、平成15年以降に兵庫県香美町などで見つかった偶蹄類(シカ)、長鼻類(ゾウ)、奇蹄類(サイ)、鳥類、ワニ類の足跡化石の発見は特筆すべきものの一つです。足跡化石が見つかった地層は、およそ1700万年前から2000万年前、大陸の縁にあった日本列島の陸地となる部分が、大陸から離れ始めた日本海拡大初期の時代のもと考えられています。その地層からはコイ科の魚など、淡水にくらす生物の化石も見ついていることから、大陸の縁に沿って淡水の湖沼などが長く広がっていたと考えられています。その時代の動物の足跡化石は、山陰海岸以外では福井県などの限られたところでしか発見されておらず、その時代の動物相を知る貴重な発見となりました。

足跡化石は多くの偶然が重なってできる極めて貴重なものです。まず、動物が湖沼のぬかるみなどに足跡を残します。さらにその足跡の刻印された泥が乾燥して固化し、その上に新たな砂などが覆いかぶさって地層となり、長い年月の堆積により固い岩石となります。さらには、地層に閉じ込められていた足跡化石は上部の地層が浸食されることに



多くの足跡化石が見つかった下浜(兵庫県香美町の波食棚(手前の3枚のササの葉状のへこみが1体のシカの足跡化石を表す。2体分が確認できる。))

より、初めて地表に現れるのです。発見された足跡化石は、その形や大きさから、おおよその種類や体の大きさが推定できたり、くらしの様子を知る貴重な手がかりとなります。



兵庫県香美町で見つかった動物の足跡化石【レプリカ】(矢印はシカの歩行あと)

平成15年に見つかった太古の動物の足跡化石の実物は、今でも香美町の海岸で見つけることができます。しかし、足跡化石は波打ち際にあるため、いずれは足跡化石自体が無くなっていく運命です。山陰海岸学習館では、発見された動物の足跡化石のレプリカを展示しています。足跡化石を見ながら、太古の動物の姿や歩くようすを楽しく想像してみませんか。

(山陰海岸学習館 山田 佳範)

■ 普及活動一覧(平成27年度)

海岸の石を調べてみよう!

8月9日(日) 午前10時~午後2時

場所/岩美町立渚交流館(自家用車による移動を含みます)・大谷海岸
対象:小学生以上(小学生は保護者同伴) 定員:30名
申込開始:7月16日(木)~

浦富海岸ハイキング(鴨ヶ磯~城原海岸)

9月12日(土) 午前9時30分~正午

場所/城原海岸駐車場~鴨ヶ磯入り口~鴨ヶ磯~(遊歩道)~城原海岸
対象:小学生以上(小学生は保護者同伴) 定員:20名
申込開始:8月20日(木)~

鳥の羽で図鑑を作ろう!

9月27日(日) 午前10時~正午

場所/岩美町立渚交流館
対象:小学生以上(小学生は保護者同伴) 定員:15名
申込開始:9月3日(木)~

※申込、問合せは山陰海岸学習館(電話:0857-73-1445)へ

鳥取県立博物館付属

山陰海岸学習館

San'in Kaigan Nature Museum



■入館料:無料

■開館時間:9時~17時

■休館日:毎週月曜日・国民の祝日の翌日(月曜日が祝日の場合は翌平日に振替休館)
年末年始(12月29日~1月3日)
※7月20日~8月31日は毎日開館

【お問い合わせ】〒681-0001

鳥取県岩美郡岩美町牧谷1794-4

電話:0857-73-1445

FAX:0857-73-1446



INFORMATION お知らせ

講座・観覧会・毎週土曜はアートの日! LECTURE・FIELD STUDY・EVENT

■自然部門 ■歴史・民俗部門 ■美術部門(毎週土曜はアートの日)

2015 4 APR.	《セミナー&トーク》 「前田直衛について」	■4月4日(土)15:00~16:30/講堂・展示室 ■高校生~一般/定員なし/観覧料
	《ギャラリートーク》 生誕100年 前田直衛展	■4月11日(土)14:00~15:00/展示室 ■高校生~一般/定員なし/観覧料
	《歴史講座》 戊辰戦争従軍の因州藩兵についての考察	■4月11日(土)10:00~12:00/会議室 ■一般/20名/無料 ※鳥取地域史研究会との連携講座
	《アートシアター》 新・日曜美術館「横山大観」	■4月18日(土)14:00~15:00/講堂 ■高校生~一般/250名/無料
2015 5 MAY.	《ギャラリートーク》 コレクション展 I	■4月25日(土)14:00~15:00/展示室 ■高校生~一般/定員なし/観覧料
	《ワークショップ》 こいのぼりに入っちゃお! in 米子	■5月2日(土)10:00~11:30 14:00~15:30 /米子市児童文化センター ■幼児~小学生/定員なし/無料
	《ワークショップ》 落書きばんざい!(春編)	■5月9日(土)10:00~16:00/博物館前庭 ■幼児~一般/定員なし/無料
	《レオナルド・フジタ展関連企画》 特別講演会 講師:木島俊介(ポーラ美術館館長)	■5月16日(土)14:00~15:30/講堂 ■高校生~一般/250名/無料
	《天体観望会》 春の星を見る会	■5月16日(土)予備日:17日(日) 18:30~20:30/前庭 ■小学生~一般/定員なし/無料
	《ギャラリートーク》 レオナルド・フジタ展	■5月23日(土)14:00~15:00/展示室 ■高校生~一般/定員なし/観覧料
	《レオナルド・フジタ展関連事業》 アーティスト真島竜男氏によるレクチャーパフォーマンス 「フジタ・ダイアグラム」	■5月30日(土)15:00~17:00 ■高校生~一般/定員なし/観覧料
2015 6 JUN.	《ギャラリートーク》 稲阜と稲升(仮)	■6月6日(土)14:00~15:00/展示室 ■高校生~一般/定員なし/観覧料
	《レオナルド・フジタ展関連事業・アートシアター》 「地下鉄のザン」	■6月13日(土)14:00~15:40/講堂 ■高校生~一般/250名/無料
	《歴史講座》 因幡東照宮祭礼行列について	■6月13日(土)10:00~12:00/会議室 ■一般/20名/無料 ※鳥取地域史研究会との連携講座
	《自然講座》 顕微鏡で楽しむミクロの世界~砂からプランクトンまで~	■6月14日(日)10:00~12:00②14:00~16:00/会議室 ■小学生~一般/各15名(先着順)/無料 ※申込受付:5月21日(木)~電話のみ
	《レオナルド・フジタ展関連事業》 特別講演会 講師:林洋子(文化庁芸術文化調査官)	■6月20日(土)14:00~16:00/講堂 ■高校生~一般/250名/無料
	《歴史講座》 古文書を楽しむ(前期)	■6月21~28日(日)14:00~15:30/会議室 ■一般/20名/無料 ※申込受付:5月15日(金)~電話のみ
2015 7 JUL.	《レオナルド・フジタ展関連事業》 カモエ・パルナス上映会&トーク「ツグツグファイナダー」(仮)	■6月27日(土)15:00~21:00/鳥取市内 ■大学生~一般/定員なし
	《ギャラリートーク》 レオナルド・フジタ展	■7月4日(土)14:00~15:00/展示室 ■高校生~一般/定員なし/観覧料
	《ワークショップ》 カメラをもってまちあるき in 赤碕(予定)	■7月11日(土)13:00~16:00/琴浦町赤碕地区周辺 ■小学生~一般/20名/無料 ※申込受付:6月26日(金)~電話のみ
	《歴史講座》 吉田晋久代著「砂丘の蔭」にみる戦前鳥取市の保健・衛生・福祉	■7月11日(土)10:00~12:00/会議室 ■一般/20名/無料 ※鳥取地域史研究会との連携講座
	夏休み子ども向け関連企画	■7月18日(土)/内容未定
《野外観覧会》 川原の石をしらべよう!	■7月25日(土)10:00~15:00/午前:千代川川原 午後:用瀬中央公民館 ■小・中学生/30名(先着順)/無料 ※申込受付:7月2日(木)~電話のみ	

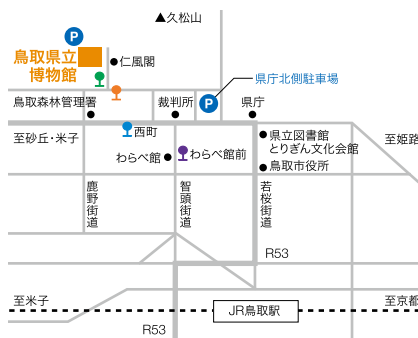
2015 7 JUL.	《スペシャルワークショップ(予定)》 ※アーティストを招いて、一緒に制作活動を行います。	■7月25日(土)/会議室 ■小学生~一般/20名/無料
	《見学会》 狛犬を調べよう!	■7月25日(土)14:00~15:30/旧鳥取市内の神社 ■中学生・高校生/10名(先着順)/無料 ※申込受付:7/10(金)~電話のみ
	《歴史講座》 ミニ和傘をつくろう	■7月26日(日)13:30~15:30/会議室 ■小学4~6年生とその保護者/20名(抽選)/有料 ※申込受付:6/29(月)~7/12(日)往復ハガキ、Eメールのみ
2015 8 AUG.	《野外観覧会》 トンボをとろう! in 出合いの森	■7月26日(日)10:00~12:00/とっとり出合いの森 ■幼児・小・中学生/30名(先着順)/無料 ※申込受付:7月3日(金)~電話のみ
	夏休み子ども向け関連企画	■8月1日(土)/内容未定
	《歴史講座》 お金をつくろう	■8月2日(日)13:30~15:30/会議室 ■小学4~6年生とその保護者/20名(抽選)/有料 ※申込受付:7/6(月)~7/19(日)往復ハガキ、Eメールのみ
	《アートシアター》夏休み子ども向け作品の上映 藤城清治作品&エリックカール作品	■8月8日(土)10:00~11:30 14:00~15:30/講堂 ■幼児~一般/250名/無料
	《自然講座》 自作天体望遠鏡で星を見よう!	■8月8日(土)観測予備日:9日(日) 製作:14:00~16:00観測:19:00~21:00/会議室・前庭 ■小・中学生/10名(先着順)/3000円程度 ※申込受付:7月16日(木)~電話のみ
2015 9 SEP.	《天体観望会》夏の星を見る会	■8月8日(土)予備日:9日(日)19:00~21:00/前庭 ■小学生~一般/定員なし/無料
	《歴史講座》 鳥取の産業(仮)	■8月8日(土)10:00~12:00/会議室 ■一般/20名/無料 ※鳥取地域史研究会との連携講座
	夏休み子ども向け関連企画	■8月15日(土)/内容未定
	《特別講演会》サイエンスレクチャー-真鍋博士講演会 「テラ/サウルスの進化~わかりやすい最新恐竜学~」	■8月16日(日)14:00~16:00/講堂 ■小学生~一般/250名/無料
	《自然講座》 夏休みの標本しらべ相談室	■8月16日(日)10:00~17:00/会議室 ■小・中学生・高校生/定員なし/無料
	《自然講座》 恐竜時代の貝の化石レプリカをつくろう!	■8月22日(土)①10:00~11:30②13:30~15:00/会議室 ■幼児~一般/各30名(先着順)/無料 ※申込受付:7月29日(木)~電話のみ
2015 9 SEP.	《アートシアター》(東京藝大大学院生の修了作品集) 「GEIDAI ANIMATION⑤」	■8月22日(土)14:00~15:50/講堂 ■高校生~一般/250名/無料
	《民俗講座》 鳥取県の民話を聞く会	■8月23日(日)14:00~15:00/歴史・民俗展示室 復元民家コーナー ■小学生~一般/約40名/聴講は無料だが、 常設展示入館料(一般180円)が必要。
	《スペシャルアートシアター》 アレハンドロ・ホドロフスキー監督作品「DUNE」	■8月29日(土)14:00~15:40/講堂 ■高校生~一般/250名/無料
	《ギャラリートーク》 コレクション展IV	■9月5日(土)14:00~15:00/展示室 ■高校生~一般/定員なし/観覧料
	《アートシアター》現代美術家による映像作品 大木裕之「松前君の兄弟の神殿の形 I」	■9月12日(土)14:00~15:30/講堂 ■高校生~一般/250名/無料
	《歴史講座》 古文書を楽しむ(後期)	■9月13~20日(日)14:00~15:30/会議室 ■一般/20名/無料 ※申込受付 8月14日(金)~電話のみ
	《ワークショップ》 落書きばんざい!(秋編)	■9月19日(土)10:00~16:00/博物館前庭 ■小学生~一般/定員なし/無料
	《スペシャルトークセッション》 ヤノベケンジさんと語る	■9月26日(土)14:00~16:00/講堂 ■高校生~一般/250名/無料
	美術部門の詳細については、「毎週土曜はアートの日!」のリーフレットをご参照ください。	

※特に記載のないものは申込不要です。※講座によっては材料費などが必要な場合があります。詳しくはホームページなどでご確認ください。※小学生以下は保護者同伴でご参加ください。
※託児サービス・手話通訳・要約筆記にも対応いたします。希望される場合は3週間前までにご連絡ください。※申し込み・お問い合わせは学芸課(0857-26-8044)または美術振興課(0857-26-8045)へ。

鳥取県立博物館ニュース No.19

平成27年(2015年)3月25日発行
編集・発行 鳥取県立博物館
住所 〒680-0011 鳥取市東町2丁目124番地
TEL 0857(26)8042(代)
FAX 0857(26)8041
URL <http://www.pref.tottori.jp/museum/homepage.htm>
E-mail hakubutsukan@pref.tottori.jp

- 入館料:常設展/一般180(150)円
()内は20名様以上の団体料金
- 開館時間:9時~17時(入館は16時30分まで)
4月~10月の企画展開催中の土、日、祝日は
19時まで開館(入館は18時30分まで)
- 休館日:毎週月曜日(祝日の場合は翌平日が休館日)
国民の祝日の翌日(土、日、祝日の場合を除く)
年末年始(12月29日~1月3日)
※具体的な休館日等は、ホームページでご確認ください。



お客様の満足の為へ...

MORRIX
株式会社モリックスジャパン
TEL 0857-23-3641
本社 鳥取市橋本町2-3-6
倉吉店 倉吉市下田中町8-7-0 中瀬ビル3F
<http://www.morrix.co.jp/>

引越しは日通
ひっこしはにっつう
0120-154022

■JR鳥取駅からタクシーで約10分
■当館駐車場21台駐車可能(なるべく公共交通機関をご利用ください)
■鳥取ICより約15分